

D II 論文

事象「歩く」と「走る」の異同

関口 美緒

要 旨

両足で行う移動の動作として「歩く」と「走る」は類似性がある。その異同がどこにあるのかを構造伝達文法的に捉えて考察した。その考察の過程で得られた新たな認識を以下の5点として示すことが本論文の目的である。①事象5は構成要素のくり返しを示すが、このくり返しの中に基本的な中断の有無があり、これにより事象5は2種類に区別される。②事象の構成要素を具体的に示す表示法を示した。③この表示法により類似の事象の異同が考察しやすくなる。④その表示法で、「歩く」と「走る」の構成要素の違いを示すと、「滞空」要素の有無にある。⑤また、事象5の構成要素から一部を「取り出す」という概念を導いた。

キーワード： 構造伝達文法, 歩く, 走る, 事象構成要素, 進行局面

D II.1 事象を構成要素で捉えて分類する

構造伝達文法では、事象を構成要素のあり方に応じて表1(次ページ)のように6種類に分類している(今泉, 2016:30-31)。事象を構成要素で分類すると、進行状態を表す「ている」形が何を表しやすいのか説明しやすくなる。

- [事象1] (例: いる) は、「状態」が進行中の事象であり、進行中の局面を捉えるのにも、「ている」形にする必要がない。
- [事象2] (例: 死ぬ) は、進行局面②がないので、「ている」形は結果状態④を表す。
- [事象3] (例: 見る) は、継続する同一動作を表すので、「ている」形は継続動作の進行局面②を表す。
- [事象4] (例: 着る) は、要素1組の動作なので、「ている」形は要素1組の進行中②を表す。結果状態の捉えやすい場合は、結果状態④も表しやすい。
- [事象5] (例: 食べる) は、1組の動作構成要素がくり返される動作なので、「ている」形はくり返しの進行局面②を表す。
- [事象6] (例: 事象2～事象5の動詞) は、期間を単位として捉えるので、「ている」形は毎日・毎週などにおける構成要素のくり返しを表す。

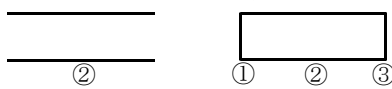
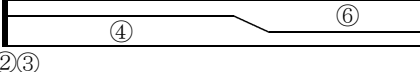
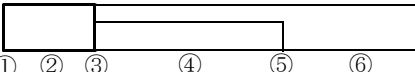
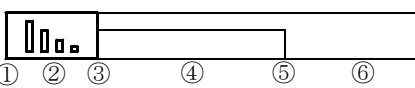


今泉はこの表の下に、同じ動詞でも、「飲む」のように、「錠剤を飲む」では事象4で、「コーヒーを飲む」では事象5で、というふうに異なる種類の事象として捉え

られることがある、と記述している。

ここに今泉(2016: 31)の表を掲げておく。これは事象(開始局面①~完了局面③)の構成要素を分析して、テイル形の表す局面について示したものである。

表D II-1 事象の構成要素

今泉(2016: 31)の表

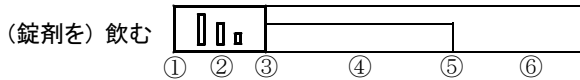
事象番号と事象例	テイルの表し やすい局面	局面②の テイル
<p>事象1 いる (ここに) いる</p> 	テイルなし	テイルなし
<p>事象2 死ぬ</p> 	死んでいる 局面④⑥	局面②の テイルなし
<p>事象3 見る</p> 	見ている 局面②(か④)	見ている 継続中
<p>事象4 着る (ゆかたを着る) 要素1組…片袖に腕を通す(▮) - 別の袖に(▮) - 前合わせ(◻) - 帯しめ(◻)</p> 	着ている 局面②か④	着ている 要素1組が 1回生起中
<p>事象5 食べる 要素1組…食べ物を口に入れる(▮) - かみ砕く(▮) - 飲み込む(◻)</p> 	食べている 局面②	食べている 要素1組が くり返し中
<p>事象6 (毎日) 食べる</p> <p>1日 1日 1日 1日</p> 	(毎日) 食べている 局面②	(毎日) 食べている 基本事象が くり返し中

D II.2 事象5は2種類に分類できる

今泉の指摘するように、「飲む」という同じ動詞でも、[事象4]「錠剤を飲む」のように1回飲み込むだけで終了する場合は事象4として捉えられ、[事象5]「コーヒーを飲む」のように何回も飲み込むことをくり返して1杯を「飲む」ことが終了するような場合は事象5として捉えられる。

[事象4] (4) 「錠剤を飲む」の構成要素には3要素がある。

錠剤を口に入れる(□)－水を口を含む(□)－両者を嚥下する(■)



図D II-1 事象4としての「飲む」

[事象5] 「飲む」で検討すると、事象5は、実は2つの場合が考えられる。

※この事象5に2種類のあることについての直接の言及は、今泉(2016)は行っていないが、今泉(2016)の間T2-11とその解答例に関係の記述がある。

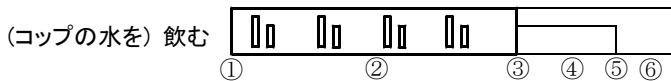
(5a) 立て続けに飲む場合……たとえば「コップの水を飲む」

(5b) 立て続けに飲まない場合……たとえば「コーヒーを飲む」

この両者には構成要素に違いがある。(5a)の「コップの水を飲む」場合には、ゴクゴクと飲むので、ふつう1杯を飲みきるまで「飲むことの休止」が入らない。一方、(5b)の「コーヒーを飲む」場合には、一口飲んでからカップを置くので、「飲むことを休止する」という要素がある。それで、「彼はいまコーヒーを飲んでいる」と表現する場合には、事象4として見れば、飲んでいないときもあるわけである。

事象5 (5a) コップの水を飲む

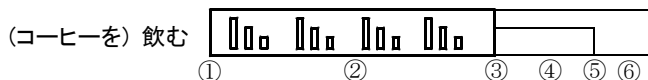
水を口に入れる(□)－水を嚥下する(■) これをくり返す



図D II-2 事象5(5a)としての「飲む」

事象5 (5b) コーヒーを飲む

コーヒーを口に入れる(□)－コーヒーを嚥下する(■)－休止する(□)
これをくり返す



図D II-3 事象5(5b)としての「飲む」

この(4)(5a)(5b)は基本的な場合であり、多くの場合は適宜、柔軟にいずれかとして捉えることになる。「コップの水を飲む」は基本的には(5a)でありながら、休止の入る場合もありうる。しかし、ここでは基本的な場合を中心に考える。

ほかの同様の例を挙げれば次のようになる。

事象 5 (5a) 同じ動作のくり返しの間に基本的にその動作の休止を含まない事象
「歩く」「走る」「泳ぐ」「(うどんを)食べる」

事象 5 (5b) 同じ動作のくり返しの間に基本的にその動作の休止を含む事象
「(店で)売る」「(相手と)話す」「(長編小説を)読む・書く」

本稿で扱う事象は「歩く」と「走る」であり、両者とも(5a)の基本的に同じ動作のくり返しが間断なく続けられる事象である。(ただし、現実はその動作を行う場合、休止を含むか含まないかについては柔軟に捉える必要がある。)

D II.3 「歩く」と「走る」の構成要素

D II.3.a 「歩く」と「走る」を対比させる

「歩く」と「走る」は両足を使つての移動ということで類似している事象であるが、ここではこの両者の違いを明確に表現できるように構成要素を分析することにする。この構成要素を考えるうえで、国語辞典での捉え方を参考にすることにした。

国語辞典による記述

国語辞典にもいろいろな記述のしかたのあることが分かる。

○『国語辞典』（三省堂、2008）

「歩く」 ①足をかわるがわる前に出し、地面をふんで進む。

「走る」 ①足で地面をうしろへけるようにして速く進む。

○『現代新国語辞典』（学研、2002）

「歩く」 [自分自身の] 足をかわるがわる動かして進む。

「走る」 [人や動物が] とびはねるように足を速く動かして、前に進む。

○『明鏡国語辞典』（大修館、2010）

「歩く」 両足が同時に地面から離れないような足の運び方で進む。

「走る」 人や動物が足を交互にすばやく動かして移動する。

○『新明解国語辞典』（三省堂、2012）

「歩く」 [常に、左右いずれかの踵カカトを地に着けた状態で]足を交互に前へ出して、進む。

「走る」 [人間・鳥獣が]足で地面を蹴めるようにして速く移動する。

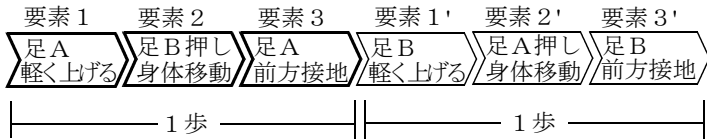
以上の国語辞典の記述では十分明確になってはいないが、「歩く」では「両足が同時に地面から離れる局面はない」が、「走る」では「両足が同時に地面から離れる局面がある」(田口ほか：2010 等参照)。

D II.3.b 構成要素の図示法2種類

国語辞典の記述等を参考にし、また実際の動作を観察することにより、「歩く」と「走る」の構成要素は次のように分析・図示できる。

「歩く」

- [要素 1] 足Aを軽く上げる
 - [要素 2] 足Bで地面を押し、体を前方に移動する
 - [要素 3] 足Aを前方に下ろして上体を前方に移動する
 - [要素1'] 足Bを軽く上げる
 - [要素2'] 足Aで地面を押し、体を前方に移動する
 - [要素3'] 足Bを前方に下ろして上体を前方に移動する
- 〔要素 1〕～〔要素 3〕が「1歩」と表現される。



図D II-4 構成要素内容を示す「歩く」の図

「走る」

- [要素 1] 足Aを上げる
 - [要素 2] 足Bで地面を強く蹴り、体を滞空で前方に移動する
 - [要素 3] 足Aを前方に下ろして上体を前方に移動する
 - [要素1'] 足Bを上げる
 - [要素2'] 足Aで地面を強く蹴り、体を滞空で前方に移動する
 - [要素3'] 足Bを前方に下ろして上体を前方に移動する
- 「歩く」と異なり、〔要素 1〕～〔要素 3〕は「1走」ではなく、「1歩」のままである。つまり「1歩」はあるが、「1走」はない。



図D II-5 構成要素内容を示す「走る」の図

この図示法は、関口 (2014) の図4-6 a bを参考にしている。

図中の「A, B」は、左右2本の足を区別するために使用している。Aが左足ならBは右足である。逆もありうる。また、「'」の付いた「要素1'」～「要素3'」は、

「'」の付かない「要素1」～「要素3」で用いられる足とは異なる足で生起する同じ要素である。

要素の1組は2歩である。(1歩[要素1～要素3]+1歩[要素1'～要素3'])

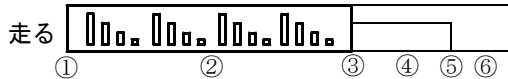
D II.3.c 目的による構成要素分析の違い

国語辞典の語義記述にも視点の違いにより、さまざまな捉え方がある(D II.3.a)ように、事象の構成要素をどのような視点から、どの程度細かく分析すればよいのかは、その分析の目的によって異なる。今泉(2016:35)は、動詞「走る」を事象5に属するものとし、その構成要素を次のように示した。

要素「走る」は[4要素で1組]となっていて、これがくり返します。

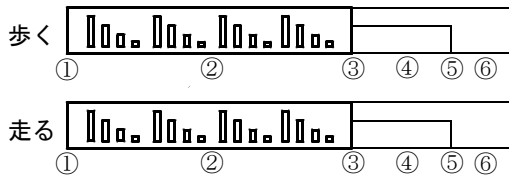
片足を上げる(□)ーその足を下ろして後ろに蹴る(□)

ー別一の足を上げる(■)ーその足を下ろして後ろに蹴る(■)



図D II-6 今泉(2016:35)の「走る」の要素分析

確かに事象「走る」を単独で考察すればこの分析でも目的を達成することはできる。しかし、両足を使つての移動ということで類似している事象「歩く」と対比することが目的である場合でも、同じ図示になるであろう。



図D II-7 構成要素を抽象化した「歩く」「走る」の図(4要素)

これは、今泉の図示は、事象の構成要素を**抽象化**して、①～⑥の全局面で捉えることに目的があるためである。

これに対して、関口の前掲の図示(図D II-4, -5)では、入れ物としての図は同じでも、事象(局面①～③)の構成要素の詳細を図の中に示すことに目的がある。今泉(2016:35)が次のように示していた構成要素のそれぞれを図中に示したわけである。

片足を上げる(□)ーその足を下ろして後ろに蹴る(□)

ー別一の足を上げる(■)ーその足を下ろして後ろに蹴る(■)

ここに事象を捉えて表示する2種類の図示法があることになるわけだが、これは記述の目的に応じて使い分けることになる。

D II.4 「歩く」と「走る」の異同

[同] 抽象化された事象構成は同じ

「歩く」「走る」の事象構成は、両者とも、要素1組がこうなっている。

[要素1～要素3] + [要素1'～要素3']

つまり6要素、2歩、から成り立っている。事象5の(5a)なので、基本的に同じ動作のくり返しが間断なく続けられ、その動作の休止を含まない事象にあたる。

「歩いている」という表現も、「走っている」という表現も、くり返しの進行中を表す。今泉の上の図では、各要素が抽象化されており、この段階では両者は「同じ」といえる。

関口の示す要素分析(図DII-4、-5)を抽象化された表示法で示せばこのようになる。



図DII-8 構成要素を抽象化した「歩く」「走る」の図(6要素)

[異1] 事象構成の異なり……具体的に見る

構成要素を具体的に扱うと、違いが見えてくる。

「歩く」と「走る」の構成要素1～要素3での違いを分かりやすくするために表にすると次のようになる。(この表の下に続くはずの、要素1'～要素3'はAとBを入れ替えた同様のものなので省略する。)

表DII-2 「歩く」と「走る」の構成要素

	歩く	走る
要素1	Aを軽く上げる	Aを上げる
要素2	Bで地面を押し、体を移動	Bで地面を蹴り、 滞空 で体を移動
要素3	Aを前方に接地し、上体を移動	Aを前方に接地し、上体を移動

[要素1] では、「歩く」も「走る」も基本的には同一だが、足の上げ方が「歩く」の方が相対的に軽い。

[要素2] では、「歩く」の場合、両足が同時に地面から離れることはない。

「走る」の場合は、両足が同時に地面から離れる「滞空」期がある。

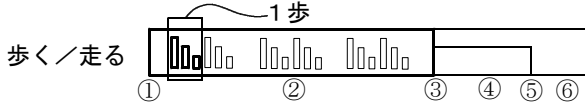
[要素3] では、両者とも基本的には同一である。

このように、「歩く」と「走る」では、「要素2」に顕著な違いがあり、「滞空」期の有無で異なっている。

「違い」の第1として、このような事象構成の異なりを挙げることができる。

[異2] 「1歩」=構成要素の半分

「歩く」も「走る」も構成要素の1組は2歩である（[要素1～要素3]+[要素1'～要素3']）から、「1歩」といえば構成要素の半分ということになる。この「1歩」について扱いの違いがある。



図D II-9 「歩く」「走る」の「1歩」は構成要素1組の半分

「歩く」では、「1歩歩いてみてください。」と言えるが、「走る」では「*1歩走ってみてください。」とは言えない。

「歩く」では、構成要素の1組(2歩)の全体を捉えなくとも、半分(1歩)で表現できる。これに対して、「走る」ではそれができない。少なくとも2～3歩は必要である。

2～3歩、走って跳んだ。

つまり、「歩く」では、構成要素の半分(1歩)が表現できるが、「走る」は構成要素の半分では表現できず、1組(2歩)からしか表現できない、と言える。

1歩歩くごとにため息をつく。

1歩歩いては立ち止まり、……。

などの表現は可能であるが、この「歩く」を「走る」に置き換えることはできない。

*1歩走るごとにため息をつく。

*1歩走っては立ち止まり、……。

[異3] 「1歩走る」は別の動詞になる

仮に「1歩走る」を表現するとすれば、それは要素1～要素3のことである。それは「滞空する」ことの表現となり、別の動詞「跳ぶ」で表現する事象になる。

水たまりがあったので、*1歩走って渡った。

とは言わずに、

水たまりがあったので、(1歩)跳んで渡った(跳び越えた)。

ということになる。

「歩く」は1歩でも「歩く」だが、「走る」は1歩だと「跳ぶ」になる。

[異4] 「1歩歩く」は進行中で表現できない

動詞が「食べる」の場合であれば、

「1口食べてみてください」も「1口食べている」も言える。

しかし、「歩く」の場合は、

「1歩歩いてみてください」は言えるが、「*1歩歩いている」は言えない。

つまり、「1歩歩く」は進行中の表現ができない。

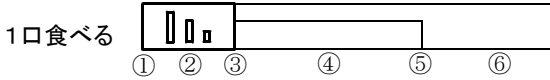
D II 論文 事象「歩く」と「走る」の異同

これは「1口食べる」が事象4で捉えられるのに対して、「1歩歩く」は事象4ではなく、事象5から取り出した部分、しかも要素1組の半分だからである。

「1口食べる」の構成要素は次のとおり3要素で、これで1回の動作は完成する。

食べ物を口に入れるーかみ砕く(咀嚼)ー飲み込む(嚥下)

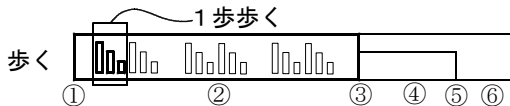
これは事象4にあたる。



図D II-10 事象4としての「食べる」

(ただし、「1口食べている」は表現できても、局面③の「嚥下」に至っていないので、「食べる」事象は完了はしていない。)

これに対して「1歩歩く」は、事象5から取り出した、要素1組の半分であり、事象4としては捉えられない。



図D II-11 事象5の一部分である「1歩歩く」……要素1組の半分

事象4でも「座る」のようにほぼ瞬間的な事象であれば、進行中を表現することはむずかしい。同じく事象4の「着物を着る」や「薬を飲む」なら、一定の時間がかかるのであり、「いま着物を着ている」「薬を飲んでいる」と進行中を表現することができる。

このことから考えると、「1歩歩く」の場合は、「1歩」が事象5から構成要素1組の半分だけを取り出したものであることと、ほぼ瞬間的な事象であることから、進行中を捉えにくいものと思われる。

これは事象を進行の局面で捉えるには一定の時間的継続が必要であることを意味している。

なお、事象5からの「取り出し」という視点から見れば、上の[異2]で見たことは、「歩く」では要素1組の半分の取り出しが可能で、「走る」では要素半分の取り出しはできず、最小1組から取り出しが可能になるということになる。

D II.5 まとめ

本稿で行ったことは以下のことである。

- ・くり返しを示す事象5に、中断の有無で2種類の区別のあることを示したこと。
- ・「歩く」と「走る」の構成要素を示し、違いは「滞空」要素の有無にあると示したこと。
- ・事象の構成要素の抽象的な表示法に加え、あらたに具体的な表示法を示したこと。
- ・その表示法は特に類似の事象の異同を考察するのに役立つことを示したこと。
- ・事象5の構成要素から一部を「取り出す」という概念を導いたこと。

D II 参考文献

- 今泉喜一 (2000) 『日本語日本語構造伝達文法』 揺籃社
 今泉喜一 (2016) 『日本語のしくみ (2) - 日本語構造伝達文法T -』 揺籃社
 国立国語研究所 (1987) 『現代日本語動詞のアスペクトとテンス』 秀英出版
 柴田武他 (2008) 『類語辞典』 講談社
 新宅幸憲他 (2002) 『スポーツ動作学入門』 市村出版
 関口美緒 (2014) 『日本語心理動詞の研究 - 生理的・心理的現象から言語表現までを考える -』 杏林大学博士論文
 田口貞善他 (2010) 『スポーツサイエンス入門』 丸善株式会社
 中原凱文他 (2010) 『健康科学としての運動生理学』 文化書房博文社
 吉川武時 (1971) 「現代日本語動詞のアスペクトの研究」 金田一春彦編 (1976) 『日本語動詞のアスペクト』 所収 麦書房
 今井邦彦監訳 (2015) 『意味論キータム事典』 開拓社 / “Key Terms in Semantics”
 Murphy, Lynne and Koskela, Anu (2010) Bloomsbury Publishing Plc, London
 現代日本語書き言葉均衡コーパス『少納言』 http://www.kotonoha.gr.jp/shonagon/search_form

研究者紹介 関口美緒 Mio Sekiguchi

学歴: 駒澤大学文学部地理学科卒業

サンタアナカレッジリベラルアーツ (准学士号取得) 米国・カリフォルニア州
 サウスウエスタンカレッジ (運動生理学・動作学系単位取得) 米国・カ州
 杏林大学大学院国際協力研究科博士課程修了 (学術博士号取得)

ボランティア活動: メキシコ系アメリカ人研究 (教育分野) での活動

日系アメリカ人退役軍人施設での文書作成活動, その他

職歴: 早稲田大学人間科学部中村桂子研究室 (生命科学) 秘書, 東京都特別区大

田区役所・行政職, [米国カリフォルニア州] サウスウエスタンカレッジ
 文学言語学部, 及びパロマーカレッジ世界言語学部で非常勤講師

現職: メリーランド大学州立大学アジア校非常勤助教授

筑波大学グローバルコミュニケーション教育センター非常勤講師 その他

日本語構造伝達文法との関わり: 博士課程で今泉先生の授業を受け, 論文を読み,
 その論理の明確さに感銘を受け, 研究。

今回の論文: 専門の「心理動詞」のアスペクト研究に, 経歴から身につけた運動
 生理学系の知識を加えて, その視点から「動作動詞」のアスペクトを捉えた。

今後の研究予定: 動詞のアスペクトを的確に分析できる方程式である「局面指示
 体系 (今泉2000)」を使い, 心理動詞のアスペクトの更なる解明を試みたい。